

ユダヤ人たちと議会の前で証しをしたパウロでしたが、反発されて、殺害の計画まで組まれました。その謀議を甥から聞かされたパウロは、千人隊長の所に甥を送り本人の口でその事実を伝えさせました。驚くべきことに470名もの護衛兵が付けられ、パウロはカイザリヤの総督のもとに護送されることになりました。

1. 千人隊長からペリクス総督への手紙 (25～28節)

①手紙の冒頭 (25～26) 「そして、次のような文面の手紙を書いた。『クラウデオ・ルシヤ、つつしんで総督ペリクス閣下にごあいさつ申し上げます。』」

千人隊長はパウロを送り出すにあたって、ペリクス総督に手紙を記しました。その冒頭で、自分の名前を伝えます。クラウデオ・ルシヤが彼の名でした。そして、「つつしんで総督ペリクス閣下に挨拶します」と、まことに丁寧な書き出しで総督に手紙を書き始めたのです。

②捕らえたパウロのこと (27) 「『この者が、ユダヤ人に捕らえられ、まさに殺されようとしていたとき、彼がローマ市民であることを知りましたので、私は兵隊を率いて行って、彼を助け出しました。』」

ここからは手紙の要件に入ります。この者パウロはユダヤ人に捕縛されて、殺されようとしていた時に、私が駆け付けたのです。聞くと、彼は生まれながらのローマ市民だということです。何としても市民である者を守らねばと、助け出したのです。ここでは彼をおち打ちをさせようとしたことなどは省略されています。

③議会へ出頭させ (28) 「『それから、どんな理由で彼が訴えられたかを知ろうと思い、彼をユダヤ人の議会に出頭させました。』」

ここは23章の前半にありますが、彼がなぜユダヤ人たちから訴えられているのかを知るために、ユダヤ人議会に出させたのです。

2. 裁きは千人隊長から総督の下に (29～32節)

①大きな罪は見当たらず (29) 「『その結果、彼が訴えられているのは、ユダヤ人の律法に関する問題のためで、死刑や投獄に当たる罪はないことがわかりました。』」

千人隊長としては、ローマの法に触れる何かがあればパウロを裁く可能性もあったのですが、争われている内容はユダヤ人の律法に関することであり、死刑や投獄にあたるようなものではないことを記したのです。

②総督下での裁判の要望内容 (30) 「『しかし、この者に対する陰謀があるという情報を得ましたので、私はただちに彼を閣下のもとにお送りし、訴える者たちには閣下の前で彼のことを訴えるようにとお願いしておきました。』」

ここからはパウロ殺害計画に関することを千人隊長は伝えます。その



陰謀の情報は、パウロの甥が伝えました。このままでは、ローマ市民であるパウロの命が危うく、ペリクス総督の判断を仰ぐことが得策であると判断したということなのです。なお、訴えた者たちもペリクス総督に直接申し立てるように言っていることも記しました。ここまでが手紙の内容です。

- ③アンテパトリスに (31～32) 「そこで兵士達は、命じられたとおりにパウロを引き取り、夜中にアンテパトリスまで連れて行き、翌日、騎兵たちにパウロの護送を任せて、兵営に帰った。」

千人隊長によって編成された護送部隊は 470 人でした。彼らはパウロの身柄をあずかると、午後 9 時頃に出発しエルサレムから西北に直線ならば 50 キロほどの所にあるアンテパトリスまで連れていきました。それは強行軍であったと思われます。そこまで着くと、歩兵、僧兵の 400 人は兵営に引き返し、後の護送には騎兵隊 70 人に任せたのでした。

3. 裁判を託された総督 (33～35 節)

- ①カイザリヤに着き (33) 「騎兵たちは、カイザリヤに着き、総督に手紙を手渡して、パウロを引き合わせた。」

騎兵たちはパウロを北に直線距離 45 キロほどにあるカイザリヤまで護送。着き次第、総督に千人隊長からの手紙を渡した上で、パウロを引き合わせたのでした。

- ②手紙を読む総督 (34) 「総督は手紙を読んでから、パウロに、どの州の者かを尋ね、キリキヤの出であること知って」

ペリクス総督は早速に千人隊長からの手紙を読みました。その上で、目の前にいるパウロにその出身をたずねます。パウロはキリキヤのタルソであることを伝えました。ペリクス総督はキリストを十字架につける決断をしたポンテオ・ピラト総督の後、6 代あって、その次に総督になったのがペリクスでした。ペリクス総督は奴隷出身であり、宮廷での権勢を握っていた兄弟ベラのおかげでした。ペリクスは生まれながらにしてローマ市民権を持っているというユダヤ人であるパウロについては興味を持ったことでしょう。

- ③訴える者が来てから (35) 「『あなたを訴える者が来てから、よく聞くことにしよう』と言った。そして、ヘロデの官邸に彼を守っておくように命じた」

しかし、その他の質問については、ユダヤ人側の大祭司などが訴えにに来てから、詳しく聞くことにすると伝えました。そして、パウロの身柄についてはヘロデの官邸で守るように部下に命じました。ヘロデ官邸はヘロデ大王がカイザリヤに建てたもので、その当時はローマ総督の管理下にありました。

《結論》

今朝の聖書箇所には神もキリストも出てきません。しかし、脈々と主なる神のお働きというものをその中に見ることができます。旧約聖書のエステル記は興味深いですが、やはりエステル記にも神は出てこないのです。エステルはユダヤ人でしたが、ペルシャの王の王妃となったのです。ユダヤ人である叔父モルデカイは彼女を娘として育てた人です。王は彼女を特別に愛しました。一方、政治にはハマンを重用しました。さて、モルデカイはそんなハマンにひざまずきませんでした。ハマンは彼がユダヤ人であることを知ると、彼ばかりでなく、ユダヤ人を根絶やしにしようと思いました。モルデカイはエステルと連絡をとりました。ユダヤ人の危機を知ったエステルは祈りを要請しました。そして、エステルは王に、宴会にハマンとの同席を願います。ハマンはモルデカイ処刑の用意をします。しかし、ついにハマンの謀略のすべては明らかにされ、ユダヤ人たちは守られ、ハマンは逆に処刑されるのです。述べたように、この書には神の名はありませんが、歴史を導いてくださる主なる神が一連の出来事に働いてくださっていることを読みとることができます。

それと同じように、今朝の聖書箇所においては、パウロは何度も生命を捕らえる危機に遭遇します。しかし、ローマ軍の百人隊長、千人隊長という実力者たちが、パウロの生命を守る役割を果たすことになったのです。そのきわめつけは、これでした。つまり、多くのユダヤ人たちと、決死な覚悟の 40 名たちがパウロの殺害計画をたてたのです。その局面に驚きの備えが与えられたのです。パウロの甥がその情報を聞きつけ、パウロと百人隊長を経て千人隊長に告げられました。すると彼はなんと 470 名の兵士達をパウロー人の護衛のために召集したのです。そして、手紙をもつて、総督のもとに送り届けられたのです。パウロはカイザリヤのペリクス総督に会いました。ローマ市民であるとはいえ、ここまで手厚く扱われることは不思議なことです。パウロが主から「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかししなければならない」(11 節)と告げられたことは、どこまでも真実であったのです。

かつて、アブラハム、イサク、ヤコブに主は祝福の約束をされました。しかし、おかれた状況はそれぞれにおいて、困難がありました。実現不可能と思われるような場合もありました。にもかかわらず、そのお約束は成就していったのです。それは人間の側では考えつかないようなこともありました。

私たちの歩みにおきましても、先が見えていないことがあります。人間関係、仕事そのもの、家庭問題、健康問題等々において、困難に直面していることでしょう。それに伴う、悩みや苦しみもあるかもしれません。しかし、かつて主があなたに教えられたこと、示されたこと、約束して下さったことはありませんか。それらは今でも生きています。そして、それは実現されます。そして、もし主のお約束が欲しいと願っている方がいますか。祈りましょう。聖書にもどりましょう。聖書の御言葉は現代に生きる私たちに有効なのです。主のあわれみがお一人お一人の上にありますように。